

山梨大学附属図書館報

やまなし

2020.3.23
vol.17
no. 2

contents

- 2 | 本を読むことにおもしろくのめりこむ
- 4 | 図書館利用者の声
- 5 | 学生にすすめる本
- 6 | 図書館トピックス
 - 「生と死のコーナー」講演会開催 [分館]
 - 近代文学文庫講演会開催 [本館]
 - 絵画展示開催 [本館]
 - ミニコンサート開催 [本館]
- 8 | ● データベース講習会開催 [分館] ほか



本を読むことにおもしろくのめりこむ

なかむら かずひこ
教育学域長 中村 和彦

本を読むことが好きです。教育学や運動学といった専門書も読みますが、小説や紀行記、随筆といった類の本もよく読みます。百科事典や図鑑を眺めることも大好きです。その意味で、図書館は、私の生活に欠かすことのできない大切な、そして素敵な場所です。

ところで、いまの日本の子どもたちは、おもしろく本を読んでいるのでしょうか？ 本を読むことにのめりこんでいるのでしょうか？ 私の専門分野は発育発達学です。そこで本稿では、今日の子どもの生活を顧みながら、本とのふれあい、読書のおもしろさについて考えていきたいと思います。

1. 子どもの頃の図書館の思い出

私は、山梨大学のあるここ甲府で生まれ育ちました。実家は甲府市南部の青沼町で、湯田小学校、甲府南中学校で学びました。小学校時代・中学校時代とも、学校の図書室は、私にとって非常に魅力的な場所でした。また当時、家の近くにあった遊亀公園に市立図書館があり、そこにもよく通っていました。物語や伝記に自分自身が入り込み、動物や虫の図鑑を飽きることなくながめ、昔の出来事にドキドキし、世界の街々に思いを馳せていました。

子どもの頃は、誰からも強制されることなく、自らひたすら本の世界にのめり込んでいたような気がします。大人になってからは、一定の時期にあるジャンルの本を読むことに夢中になっていました。星新一のSFやアガサクリスティの推理小説をむさぼり読み、遠藤周作や村上龍の考え方に心を震わせ、そして60歳を迎えた今は、吉田修一、石田衣良、重松清の本が必ず1冊はバックの中に入っています。本を読むことが好きになった原点は、間違いなく子ども時代の本との豊かな出会いであったと思います。

2. 「持ち越し効果」とは

発育発達学の研究に「持ち越し効果」という分野があります。私たちは、学習し経験した時に、多くの事柄を知り、技能を習得しながら、さまざまな能力を高めることができます。しかしそれだけでなく、ある要因を含んだ優れた学習や経験は、その後の人生において、学習をし続けたり経験をしてみようとす動機づけとなるのです。

いま日本人の運動実施率は、世界の最低ラインとなっています。昨年12月に実施された全国調査によると、日本の成人の週1回以上の運動実施率は、わずかに53.6%です。では運動をしている人と運動をしていない人には、どのような違いがあるのでしょうか？

多くの人は、子どもの頃にスポーツ少年団、運動部活動などでスポーツ活動をした人は運動を続けている、または子どもの頃から運動の得意な人が運動を持ち越していると思われるのではないのでしょうか。しかし実際に検証してみると、子どもの頃の競技スポーツの経験や、運動の得意不得意は、大

人になってからの運動実施の持ち越しに大きく影響する要因にはなっていないのです。

実は子ども時代に、自らおもしろくのめり込んだ遊びの経験こそが、子ども時代の運動実施だけではなく、「運動をしようとする力」や「運動をし続けようとする力」を生み出し、運動の実施に大きく影響するものであることが解っています。

本を読むことも運動することと、全く同様だと思います。子どもの頃に、一定の時間本を読むことを強要されたり、知識を得ることだけのために本を読むことを経験しても、生涯にわたる読書の持ち越しには繋がりません。「おもしろく」「のめり込みながら」「自ら」本を読むことが重要なのです。しかし、今日の多くの子どもが、自らおもしろくのめり込む読書経験をしているとは思えません。

3. 大人が生み出した子どもの生活の乱れ

私は、日本の子どもたちの生活が乱れ「子どもらしさ」が失われた原因は、「子ども」にあるのではなく、私たち「大人」にあると考えています。

私たち日本の大人は、ずっと便利な社会を求めてきました。その結果、我が国の効率化、自動化、情報化は、世界の最先端となり、かつて経験したことのない利便性の高い生活を手に入れることができました。しかしその過程において、日本の将来を担う子どもたちにとって最も大切な、豊かなこころと健やかなからだの育みを失ってしまったのではないのでしょうか。

今の日本には、子どもに知識や技能の習得のみを求め、目先の結果だけを評価する大人が非常に多く存在していると思います。そして子どもから「おもしろく本を読むこと」「おもしろく運動すること」を奪っているのでは？と考えています。

4. 「プレイリード」「リーディングリード」の大切さ

運動遊びも読書も、教えること、指導することができません。指導することで、遊びや読書の中に存在する、自主性、自由性、創造性がなくなってしまう。結果的に、「おもしろく」「のめり込む」「自ら」といった持ち越しの要因が消失してしまうのです。

ドイツには「プレイリーダー」、オーストラリアには「プレイデリバラー」という、子どもの遊びを先導する、遊びを届けるという役割の大人が存在します。運動技能の指導やスポーツの勝敗にこだわる日本のスポーツ指導者とはまったく異なり、子どもの遊びを保障する存在です。

近年わが国においても、文部科学省（スポーツ庁）が推奨し、スポーツ外郭団体や自治体、企業、NPOなどが主体となり、「プレイリーダー」の養成と「プレイリード」の考えを普及する取組が始まりました。この取組は、全ての子どもたちがおもしろくのめり込みながら身体を動かすことを目指しています。私は、この「プレイリード」の考えの広がりこそが、大人になってからの運動の持ち越しに繋がり、健やかな育みを保障するものであると確信しています。

同じように、本を読むことのおもしろさを伝える「リーディングリーダー」の養成や、「リーディングリード」の考えを広めていくことが必要であると思います。お父さんお母さん・保育士・教師といった子どもの身近にいる大人が、その重要性を認識することが必要であると思います。

そのことが本を読むことに夢中になり、のめり込んでいく子どもを育み、生涯にわたって本からいろいろなことを学び感じ取れる、豊かな生き方を保障するものであると考えます。





「知らない」を探す場

やなぎ あきのり
柳 彰典
医学部 医学科 4年

山梨大学に入学してから4年近くが経ちました。学科の勉強の合間に、図書館本館で本を探すことは、私の楽しみです。毎回、図書館への道中、今日はどんな「知らない」に出会えるのか、と期待しつつ、自分を落ち着かせながら入館しています。

入館すると、まず新着書架や一般書架の書棚を一通り眺めていきます。タイムリーな話題であるか否かに関わらず、タイトルや背表紙に魅かれた本を手にとり、まえがきなどにざっと目を通します。気に入れば本を借り、家でじっくり読んでみます。そして、私の知らない分野・著者・思想に出会い、啓発されたとき、その本に出会えた喜びを率直に感じます。読書を通じて、医学を含むいろいろな分野で自分の知識の地平線を広げていきたいです。知識が広がって、異なる領域の知識が重なっていたり、繋がっていたりすると、まるで新しい知のクロスオーバーを発見したかのような高揚感を覚えます。

私は、図書館に行くことで「知らない」を探すというルーチンを繰り返しています。それは、私自身がまだ無知である、ということを実感し、新しいものや知らないものを求めているからなのだと思います。

将来、誰も答えを知らない問題に取り組むことになった場合、どれだけ発奮できるかは、それまでの「知らない」に出会った経験によるのではないのでしょうか。あわよくば、その際に新しい知を見出せればと思います。

末筆ですが、図書館職員の皆様によります丁寧なお仕事に対し感謝申し上げます。



いつでも迎えてくれる場所

くりはら なつき
栗原 夏希
医学部 看護学科 2年

1年生の時は甲府キャンパス、2年生からは医学部キャンパスの図書館を利用しています。医学分館には、医学・看護系の専門書が幅広く揃っており、疾患や看護ケアについての課題に取り組む際には、多くの本の中から選んで学習することができます。スマートフォンですぐに情報を集められる時代ですが、本は匿名の情報が氾濫するインターネットに比べて正確性や信憑性が高く、正しい知識を得ることができます。

また、特別利用の申請を行えばほぼ24時間利用が可能のため、試験前や実習中は夜遅くまで勉強したり、レポートを書いたりすることができます。他の学校の話聞いても24時間図書館を利用できる学校は少なく、部活動やアルバイトの後にも図書館に行けることはとてもありがたいです。

図書館への要望としては、学習室を防音にしてほしいということと、飲食スペースを作ってほしいということです。図書館資料やAV資料、ホワイトボードを利用してグループでのディスカッション、プレゼンの練習などができる学習室ですが、つい盛り上がりすぎてしまうと部屋の外まで声が漏れてしまい、閲覧室まで響いていることがあります。また、飲食をする際には外に出る必要があるため、図書館の中に気軽に飲食ができるスペースがあると嬉しいです。

居心地のよい図書館の雰囲気を作り私たち利用者を支えてくださっている職員の方々に感謝しながら、利用のルールを守り、これからもたくさん利用していきたいと思っています。

● 本 館 2F 一般書架 498.5

食 - 90億人が食べていくために -

John Krebs著
伊藤 佑子・伊藤 俊洋共訳
丸善出版



食に関しては、様々な情報が飛び交っています。組換え食品も増え、「天然酵母」、「酵素」などちょっと不思議な言葉の使い方も見受けられます。生活習慣病も増えている中で、商業的な情報に惑わされず、広い観点から食を考えることが必要だと思っています。本書は、200ページ程度の短いものですが、少なくとも高校の生物や化学を勉強した人向けの図書で、少し専門的な知識を必要としています。人類の食における歴史、味覚、好き嫌い、食文化、アレルギー、栄養、肥

満、食糧増産、バイオテクノロジー、気候変動など多くの重要な課題を、様々な角度からわかりやすく説明しています。世界的に見れば人口がどんどん増え、食糧不足が問題視されているにも関わらず、たくさんの食品を捨てている私たち。政治、経済、宗教、水の不足、温暖化などを総合的に考える必要があります。食に関する知識をリセットし、広い視点を養うためにも、是非、ご一読ください。



生命環境学部地域食物科学科
ワイン科学研究センター
おくだ とおる
奥田 徹 教授

● 医学分館 2F 開架書架(第三) WW103/BJJ

● 本 館 書庫・一般書架和 491.374

ビジョン - 視覚の計算理論と脳内表現 -

デビッド マー著
乾 敏郎・安藤 広志訳
産業図書



AI聡明期の今だからこそ、お勧めしたい本である。ヒトは見たものが何であるかを簡単に答えることができる。しかし、コンピュータビジョンの世界では、これは難問であった。深層学習の発展により、コンピュータが画像を分類できる能力は格段に進歩した。昨今のコンペでは、画像に含まれる物体が何であるのか、100%近く正解できるAIも出現し、つい10年前にはできなかった人工的な物体認識の壁は崩壊しつつある。しかし、この画期的な技術にもいくつか問題がある。一つは、深層学習では無数の画像サンプルを学習させなければならないこと。ヒトはそんなに学習サンプルがなくても、100%画像分類ができる。また、AIになぜこのような能力が発揮できるのか、その根本的な原理がわからない。

本書は、脳の理論研究を創設した天才であるDavid

Marrが、脳の視覚情報処理の難しさを説いた名著である。当時はコンピュータによる画像分類能力は限りなく低く、どうしてヒトは難なく物体認識ができるのか、大きな謎であった。Marrはいち早く、素子を並べて画像分類ができるようにするだけでは、その基となる計算原理は理解できないことに気付いた。そして、脳の計算原理と、その基盤となる神経ネットワークの実装をシームレスに理解するのが重要であり、そのための道筋を提唱しただけでなく、脳における物体認識の具体的な手順までも提唱したのである。Marrが提唱した脳の理論には不十分な点は多々あるが、彼が提唱した道筋は、今でも多くの計算論的神経科学者のバイブルになっている。私は本書を大学生の時に読んだが、いま改めて、何故AIに凄いことができるのか、を考える時期に来ているのではないかと思う次第である。



生理学統合生理学講座
うか たかおり
宇賀 貴紀 教授

医学分館「生と死のコーナー」関連行事 講演会 開催

「生と死をつなぐケア - コントロールできないものに寄り添うこと」

令和元年10月10日（木）、医学部キャンパスにおいて、附属図書館医学分館「生と死のコーナー」の関連イベントとして講演会を開催し、地域の医療関係者、一般の方、医学生、教職員など約200名が聴講しました。

今回は、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻 田村恵子教授をお招きし、「生と死をつなぐケア-コントロールできないものに寄り添うこと」と題し、ご講演をいただきました。

講演では、「全人的苦痛と緩和ケア」について、全人的苦痛とは、身体的苦痛、精神的苦痛、社会的苦痛、スピリチュアルな苦痛であり、それに対して緩和ケアがどのように定義づけられるか、さらに質の高い緩和ケアの提供に必要な知識・技術の説明がありました。

また、「エンド・オブ・ライフにあるがん患者へのケア」について、がんサバイバー（がん患者）の4つのステージの説明があり、終末期に実際に患者が語った言葉を紹介しながら、看取りの経験を踏まえサポートの大切さを説き、患者の苦悩に対して医療者が共に苦しみ、寄り添っていくことの重要性を述べました。

参加者は熱心に聴き入り、「講師が患者さんの本当の思いとは何かを常に考え、寄り添っていく姿勢に感動した。」「がんと向き合う方たちと接する際、今日学ばせて頂いたことを胸に、支えられる存在でありたいと思った。」といった感想が寄せられるなど、有意義な講演会となりました。



本館 近代文庫関連行事 講演会 開催

「太宰治『お伽草子』と戦争 - 「私の桃太郎」が書けない物語作家」



令和元年11月9日（土）、甲府キャンパス附属図書館本館において、本学所蔵の近代文学文庫関連イベントとして、小澤純氏（慶應義塾志木高等学校 教諭・恵泉女学園大学 非常勤講師）をお招きし、「太宰治『お伽草紙』と戦争 - 「私の桃太郎」が書けない物語作家」と題した講演会を開催しました。

この講演会は、附属図書館所蔵の近代文学文庫に関連したイベントとして実施されたもので、当日は、一般の方、学生、教職員など24名が聴講しました。

小澤氏は、戦時下に公開されたアニメーション映画における桃太郎の扱いなども交えて、太宰治の作品に対する考察を披露し、聴講者たちは熱心に聞き入っていました。

また講演終了後、2階展示室で開催中の企画展示「生誕110年記念 - 太宰治と戦後出版」において、大木志門教育学部准教授による解説の下、見学会が行われました。

企画展示は図書館の開館時間中はいつでもご覧いただけます。ぜひお越し下さい。

◇企画展示「生誕110年記念-太宰治と戦後出版」本館2階 第一展示室にて公開中◇

本館 絵画展示 開催

L5アートミックス -井坂研究室の試み-



令和元年10月15日(火)～10月25日(金)の間、附属図書館本館2階第二展示室を利用し、井坂教授および研究室の学生による油彩画、水彩画、CG、ミクストメディア、写真等により、附属図書館絵画等展示事業(L5アートミックス-井坂研究室の試み)を開催しました。

繊細かつ力が入った井坂研究室の皆さんの日ごろの研究の成果である作品に触れ、来場者は感動しておりました。

また、今回は展示期間前に、読売新聞社・UTYテレビからも取材を受けたので、一般の方の入場者の参加も多数あったこともあり、入場者数は55名(記帳の人数)と平成30年度と比較しわずかに増加しました。

担当した教員からも学生に対して貴重な作品発表の場を与えてもらい感謝している旨の謝辞をいただきました。

今後も継続して事業を行うよう担当教員と密に連絡を取って事業を行い、広く宣伝し、図書館を身近なものとし図書館の利用の拡大を図りたいと思います。

*** 出品者 ***

井坂 健一郎	(山梨大学大学院 教育実践創成講座 教授)
久保 翔	(教育学部芸術身体教育コース4年)
宮崎 春菜	(// 4年)
田中 彩也香	(// 3年)
渡邊 美優	(// 3年)*



本館 図書館企画ミニコンサート 開催

～楽しいミュージカル『白雪姫』ハイライト～



令和元年12月18日(水)、昼休みのひと時を甲府キャンパス附属図書館本館において、「楽しいミュージカル『白雪姫』ハイライト」と題し、日頃、教員の指導を受ける学生によるミュージカルを開催しました。

ミュージカルでは、親しみやすいだれもが知っている白雪姫のお伽話を本学学生が熱演し、会場をわかれました。

附属幼稚園の園児をはじめ地域の皆様や学生・教職員120余名の参加者があり、美しい歌声やミュージカルに聞き入っていました。

*** 出演者 ***

教育学部 障害児教育コース
2年 平岡 柊子

教育学部 芸術身体教育コース音楽系
2年 相澤 光、落合 麻希子、佐藤 綾乃、清水 咲英、中村 美友
長谷川 美乃里、保坂 知里

1年 上野 響樺、小野 純愛、中島 那李、二俣 深晴、三木 恵里
武藤 実乃梨、山寺 由乃





医学分館 データベース講習会 開催

「UpToDate説明会」「若手研究者のための英語論文投稿セミナー2020」

医学分館では、令和元年12月4日（水）に、深井暢崇氏（株式会社 ウォルターズ・クルワー・ヘルス・ジャパン）を講師に迎え、UpToDate説明会を開催しました。また、4日及び翌5日（木）には、UpToDateの登録方法の案内についても行っていただきました。

また、令和2年1月15日（水）には、「若手研究者のための英語論文投稿セミナー2020」を開催し、セミナー前半では、医学部精神神経医学講座 鈴木健文教授が「論文査読の実際 ～精神科の場合～」と題して、論文投稿のプロセスや注意点について説明され、後半では、クラリベイト・アナリティクス・ジャパン株式会社の石堂きよみ氏をお招きし、「【論文投稿戦略メソッド】～ジャーナルを知り、良いジャーナルを選ぶには～」と題して、Web of Science（学術データベース）、Journal Citation Reports（ジャーナルインパクトファクターの検索）の効果的な利用方法等についてご講演いただきました。

医学分館では、今後も定期的に外部講師による講習会を開催する予定です。

大型プリンタ利用サービス、電子黒板貸出サービス終了のお知らせ

本館で提供していた大型プリンタ出力サービスは、機器の老朽化等によりサービスの継続が困難な状況となったため、2019年9月30日をもって終了しました。

また、ラーニングコモンズにおけるプレゼンテーション機器としてご活用いただいていた電子黒板は、電子計算機システムの賃貸借期間終了に伴い返却し、貸出サービスを終了しました。液晶テレビ、プロジェクターの貸出は継続しますので、引き続きご活用ください。

2020年度山梨県・山梨大学連携事業

「子どもの読書オープンカレッジ」のご案内

申込必要

子ども図書室では、山梨県・山梨大学連携事業の一環として、山梨県立図書館との共同企画により「子どもの読書オープンカレッジ」を実施する予定です。

今後の詳しい日程や内容は、随時子ども図書室ホームページに掲載いたしますので、ご参照ください。

【お申し込み・お問い合わせ】

山梨県立図書館サービス課 子ども読書推進担当

〒400-0024 甲府市北口二丁目8-1 TEL 055-255-1040（代） FAX 055-255-1042

主催：山梨県立図書館・山梨大学附属図書館子ども図書室



学外の方への利用案内

本館及び医学分館は、山梨大学以外の大学生をはじめ一般の方々も利用できます。詳細については、<https://lib.yamanashi.ac.jp/>をご覧ください。本館 Tel:055-220-8066（情報サービスグループ）、医学分館 Tel:055-273-9357（医学情報グループ）にお問い合わせください。



● 表紙：医学分館
場所：医学部（図書館職員 撮影）

山梨大学附属図書館報

「やまなし」
第17巻第2号

2020年3月23日 発行

編集：館報編集委員会

発行：山梨大学附属図書館

〒400-8510

甲府市武田四丁目4-37

TEL 055-220-8063